
天秤 薬局

かっぱ同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天秤 薬局

【Nコード】

N0278Y

【作者名】

かつば同盟

【あらすじ】

天上界の天秤薬局で、見習い星薬師として働くメイ。師匠のレイデンと共に、天上界の不治の病“銀河病”に対抗できる薬の研究に励んでいる。病気の人魚、カリスマの双子、特撮ヒーロー俳優、ヒトデ女など、天秤薬局に訪れる個性豊かな星守の民との交流をベースに、見えてくる天上界の社会性、宗教性、歴史などを追っていく。

第一星の登場人物

《天秤薬局 第一星登場人物》
少々ネタバレになります。人物の確認にご活用下さい。

シャラバトマ・メイ

- ・星薬師見習い
- ・レイデンの弟子

> i 3 3 7 9 1 — 1 3 6 5 <

セミロングの髪にリボン（またはカチューシャ）をつけている。天
上界の老舗薬局“天秤薬局”の見習い星薬師。基本的に敬語だが、
いつも一言多い。レイデンを過度に老人扱いし、彼の後は自分がこ
の“天秤薬局”を継ぐと明言している。大賢者の称号を持っていた
偉大な魔女シャラバトマ・ルイの娘で、星の魔力を受け止める星杯
が極端に大きいらしい。（要するに魔力が大きい）レイデンいわく
「容量が大きくても中に入っているデータがクズ」（才能はあつて
もまだ職人として技がなっていないと言う意味）
おしゃべりでハキハキと物申す分、無口で無愛想なレイデンと違っ
て商売上手。

レイデン

- ・星薬師（天秤薬局店長）
- ・88賢者の一人（天秤座）
- ・メイの師匠

> i 3 3 7 9 2 — 1 3 6 5 <

深くフードをかぶって、いつもは顔が見えないが、実際は金髪の美青年（しかし高齢）。誰も克服できなかった銀河病の進行抑制剤を初めて作った人物で、その功績がたたえられ賢者となった。口が悪く無愛想だが、銀河病患者に対しては熱心で、銀河病に打ち勝つ薬を作る事に長年を費やして来た。もともと弟子を取るつもりは無かったが、メイの才能に一縷の希望を抱き、彼女を弟子に取った。

星の魔力を受けとめる星杯はメイ程大きくないが、精錬された技術と経験、努力、なにより銀河病の特効薬を作ることへの執着心によって偉大な星薬師となった。

妻子は居らず、“輝き遅れ大三角形”の一人に数えられている。（偉大な人物なのに結婚できなかった三人のうち一人と言う意味）

セリア

・魚座宮の宮姫

> i 3 3 7 9 3 — 1 3 6 5 <

長く青い髪の美女。かつて、星皇室の妃候補の大本命と言われていた誉れ高き姫宮。しかし、銀河病が発症し妃候補のレースから脱落した。宮主の父の期待に添えなかった事、誰からも見放され、一人暗い部屋で隔離された事に傷ついていたが、レイデンやメイの存在に少しずつ癒されていく。

Dr・ブレイメル

・88賢者の一人（蛇使い座）

・星医師

> i 3 3 7 9 4 — 1 3 6 5 <

ルイの弟で、メイの叔父にあたる。蛇使い座にある総合病院の院長であり、賢者の称号を持つ医者である（ルイ亡き後、継ぐ形で賢者選ばれた）。レイデンより上の世代だが、見た目はだいぶ差がある。本人いわく、家庭を持つと老けるもの。

ルイが死んだ時、銀河病になってからでは遅いと考え、どうしたら銀河病にならないかを研究している。病院に何人も弟子を持っているが、末の息子であり弟子のバジヤードを助手としてよく連れている。

バジヤード

- ・ Dr・ブレイメルの息子で弟子
- ・ 星医師

> i 3 3 7 9 5 — 1 3 6 5 <

若くしてすでに蛇使い座の病院の星医師である。Dr・ブレイメルの息子だが、常に師匠として接している。メイとは従兄妹。大きな力を持つていながらそれを持て余すメイの事が気に入らず、昔から良く衝突していた。星医師としてのプロ意識が高く、一人の患者に固執せず全体を見る事が出来る。少しひねくれたところがあるが、医者としての才能はあり、レイデンにも認められている。

香弥^{かや}

- ・ 双子座宮の若宮
- ・ 紫衣と双子で、兄

黒髪で端正な少年。メイと同期。

紫衣^{しい}

- ・双子座宮の姫宮
- ・香弥と双子で、妹

黒髪の美少女。メイと同期で、親友と言える仲。

牛飼いさん

- ・牛飼い座の牛飼い
- ・酪農家。

ごつい。よく農薬を買いにくる。親ばかりで愛妻家。

メリディーン夫人

- ・さそり座の富豪、メリディーン家の奥様

痩せていて背が高い。夫の浮気が許せず、最近病んできている。

役人さん

・王都ノーザンクロスの役人

天パのたれ目。レイデンのところに助けを求めに来た。常にテンパリぎみ。腰が低い。白鳥の引き車に乗っている。

オルガム

・宮廷星薬師長

長髪で面長。レイデンの事をライバル視している宮廷星薬師。沢山の弟子を抱える。

シャラバトマ・ルイ

- ・かつての大賢者（蛇使い座）
- ・偉大な魔女
- ・メイの母

メイの母で、偉大な魔女。三人しかいない大賢者の一人だった。銀河病で既に亡くなっている。

1：星の底の人魚姫

> i 3 3 7 9 6 — 1 3 6 5 <

天上界は今日も通常運転。星の宮の恵みはいつも通り。

星守^{ほしもり}の民は変わらず毎晩、“星の宮”に星火を灯す。それが彼らの存在理由であり、義務である。

何一つ変わらない星の配列、その光を守る事で、得る輝きのエネルギーを営みに役立てる。

何一つ変わらない。変えてはいけない。
それは、星の宮の意志。

魚座宮は豊かな雲中海の中にある。ガラスと白い大理石と水晶で骨組み、貝殻と泡の化石が贅沢にあしらわれた、88宮の中でも特に歴史深く美しいとされる天上界遺産の一つである。

そんな宮殿の一番奥の部屋に、表向きのキラキラしい美しさとは真逆に薄暗く、音の無い深海のような部屋があった。

その部屋では、病に伏せた姫が一人、ひっそりと療養している。名を“セリア”と言う。

彼女の病はこの天上界の最たる恐れ、“銀河病”である。

「いいか“しもべ”ども。銀河病の進行抑制剤だ。心得ろ」

天上界の老舗“天秤薬局”の星薬師であり、賢者の称号を持つレイデンの声だ。

彼は右の中指からぶら下がる天秤の皿を、左手で持つ杖でこんこん叩きながら、薬の調剤を行っていた。いつもは悪戯ばかりするポイズンポプリのピクシーたちも、彼には従順である。彼の天秤の上でピクシーたちは踊り、歌い、やがて薬となる。

ところが、隣でポイズンポプリのピクシー錬成を行う彼の弟子は、その作業にほとほと手間取っていた。なにしろ“銀河病”の進行抑制剤は複雑な調剤と多種のポプリを必要とする。しかもピクシーの鮮度が命で薬も長持ちしない為、患者の診察時に作り処方する事が義務づけられている。いくらレイデンが凄腕の星薬師でも、簡単なピクシー抽出くらいは弟子に任せ、同時進行で薬を作る方が幾分楽である。

しかし、レイデンの弟子“シャラバトマ・メイ”はピクシーたちを作り上げるこの初歩作業ですらなかなか上手くいかないのである。ピクシーを作り上げるやいなや、ピクシーたちはメイの邪魔ばかりして、レイデンがフードの隙間から厳しく睨みをきかせない限り、部屋をうろついたりしている。

「おいメイ、足りないぞ」

「わ、分かってますって師匠。でもしもべたちが…」

「言い訳するな。しもべにコケにされるお前が悪い」

「……………」

メイは視線を横に流す。

「全くこれだから年寄りには。自分が未熟だった時の事なんてこれっぽっちも覚えてないんだから。生まれた時から一流だったとでも（云々）」

メイは彼女自身の天秤の上に特別な星水を足して、ぶつぶつ言いながらポプリをふやかしもどしている。

レイデンとメイの目の前では、大きなバスタブレットの薬湯に浸かった魚座宮の宮主の娘セリアが、二人の調剤をもの珍し気に覗くのが習慣だ。

「ふふ、難しそうね」

「そうですね。師匠くらいビックになるとしもべたちが自分からついていくんですけどね、こいつら一応星の宮の精霊ですから基本的に人より格上って思ってるところがあって。はあ、正直手で握りつぶしたくなるっていうか」

「あ、ほら、メイさんのフードにも一匹」

「え？ あ、いた、いたたたた！！」

メイはフードから顔にあい上がってきたしもべを引きはがそうとした。レイデンは深くかぶったフードの隙間から、その様子を淡々と

流し見て、短いため息をつく、自分の杖で大理石の床を打った。カン、か、キンの間くらいの鋭い音が部屋に響いた瞬間、そこから好き勝手していたピクシーたちが硬直し、恐る恐るレイデンを見るのである。

「いい加減にしないか、しもべの分際で。また日干しにされたいのか」

この一言が決め手である。ピクシーたちは慌ててレイデンの元に集って、列を作り、自分たちが薬として調剤されるのを待つのである。メイは呆氣にとられ、ばつの悪そうな顔で自分の作業に戻る。セリアはクスクス笑っている。

「流石ですわねレイデン師。ふふ、なんて滑稽な。ピクシーたちもこれでは悪戯できませんね」

「……………」

「それでも師匠は割としもべに甘い方ですよ！！ アメと鞭が上手いっていうんですか？ 私はとてもこいつらに優しくなれそうになり……」

「メイ……………おしゃべりがすぎるぞ」

そろそろ調剤の終盤と言う時、自分の作業もままならないのに余計な事は言いたくなるメイだ。いよいよレイデンの声音が低くなる。メイが冷や汗ながらに作業に集中する様を見て、またセリアは愉快そうにしている。

しかしセリアは一通り笑った後、いきなり現実を目を向ける。何か

にハッとした様に。

自分の体中にある、黒と白の斑点のような痣を無視する事は出来ない。

それはまるで銀河のようである。

「……………レイデン師、私は後どれくらい生きていられますか…？」

「……………」

レイデンもメイも、その言葉に顔をしかめた。しもべたちはクスクス笑っている。

「……………気弱な事を申されますな。あなたらしくもない」

「そ、そうですね！！ 病につけ込まれますよ」

レイデンは出来上がった薬を天秤から薬杯に流し込み、メイに渡した。メイはそれに星水を注ぎ、急いでセリアのところへ持っていった。

「セリア様、どうぞ」

「……………」

セリアはきまりの悪そうな微笑で、それを受け取る。

「……………ありがとう」

そしていつもの様に、この薬を飲む。

かつて、ノーザンクロスの子星皇室に嫁ぐ、妃候補の大本命と言われていた魚座のセリア。その美しかった面影はあれど、銀河病に病んだ痛々しさは素直に見て取れる。

メイは、彼女の視線を追った。何も無いはずの場所を見つめている。きつとそれは、迫り来る暗い闇。“死”だ。

銀河病は星の宮の意志。それを治す事も暴く事もかなわない。

星の光が地上に降り注ぐ限り、星守の民にとって銀河病は恐れでなくてはならないと。

それこそが星の通常運転。

明日もあさっても、繰り返し“同じ”である事を、運命づけられた天上界の星守の民。

これは、明日もあさっても、何一つ変わらない毎日の為に、“何か”を変えようとした星薬師の少女の物語。

2：天秤薬局のお客様

大きな爆発音が、今まさに天秤座の端のオアシスで響いた。ここは老舗の天秤薬局である。

その衝撃で周囲の樹に並んどまっていた鳥たちが、騒がしく飛び去っていく。

「ゲホッ…ガホッ…」

爆発でカウンターを真つ黒にした見習い星薬師のメイが、かがんでいた体勢を戻す。

「まったくもお…何で出来ないのよ!!」

カウンターの上では、真つ黒な暗黒物質がたくさんピクシーたちに囲まれて、いままさに調剤されたところだ。

「あーあまた失敗だね」

「だね、ダークマターだね」

ピクシーたちは口々に噂し、くすくす笑っている。

「才能が無いね」

「やーいへたくそー」

「ざまああああ」

口々に悪口を言うピクシーたちにいらついたメイは、そのピクシーたちに掴み掛かって握りつぶそうとする。

店の端で天上新聞を読んでいた店長のレイデンが、そのフードの間からメイたちの様子を見て、短いため息をつく。

「また失敗か。しもべたちを無駄殺しまくるから恨まれてるんだな」

「!？」

メイはレイデンに突っ込まれ、しばらくつも掴み取っているピクシーたちを解放した。

「だって師匠、こいつら生意気ですもん」

「メデイカルピクシーなんてそんなもんだ。それをちゃんと使いこなせるのが一流の星薬師つてもんだろ。その声をちゃんと聞いてやれば、自ずと応えてくれる」

「……………」

「とにかく、お前の創り出したその悲しい暗黒物質を埋葬しろ。このしもべ殺しが」

レイデンの言葉に、メイが何にも言えないでいる。するとピクシーたちは調子良く口々に「そーだこのしもべ殺しー」とか、「手厚く弔えばかやるー」とか、甲高い声でわめき出す。その声がまた、たまらなく耳に痛い。

そんな時、誰もいなかった薬局に今日の第一訪問者が現れた。メイは慌ててその失敗作、もとい暗黒物質を足下のバケツに放り込む。営業スマイルに切り替え「いらっしやいませー」と、客に愛想よく挨拶する。

しもべたちが「あ、おいこら」とか「てめー扱い酷いぞ」とか口々に言っているけど、そこら辺は無視した。

本日のお客様一組目“双子座の若宮と姫宮”

見目麗しい双子の香弥^{かや}と紫衣^{しい}。メイに取っては幼なじみ二人である。

「腰痛に効く薬はあるか」

「え？ 腰痛？」

「ええ、父が昨日立ち上がるときくしゃみをして、それで…」

「ああ…ぎっくりフラグってやつですねえ…。ねえ師匠、覚えがありますよねえ、ねえ師匠」

メイはしつこく、向こう側のレイデンに問う。レイデンは何も答えない。

「…まあ、そう言う事だ。昨日は大事な座会の途中だったと言うのに父上と来たら、ねえ紫衣さん」

「ええ香弥さん。代わりに香弥さんが仕切って下さったからよかったものを」

「……………」

メイはカウンターの後ろの無数の棚から、腰痛の薬を取り出した。

本日のお客様五人目“牛飼いさん”

酪農や牧畜が産業として有名な牛飼い座の牛飼い。

「あれ、牛飼いさんまたですか」

「どうにもこうにも、星草病ほしぐさびょうの予防になる農薬が無くなってね。あれのせいで、そこら中の草が真っ黒だ。牛たちは普通に食べて、何の影響も無さそうなのに…。星草病の草を食べている牛の乳製品は危ないとか、そこら中で噂してやがるから、こちとら商売上がったりだぜ。やっと落ち着いて来たけど…」

「……………今農家や酪農家は大変ですよねえ。星草病は昔からある、ただ草が変色するだけの大した事無い病気なのに。むしろ牛たちにとつてはおいしいらしいですよ、星草病の牧草つて。真っ黒つてのがイメージ的に良くないんでしょうね。ピンクとかだったら良かったのかな？　ねえ師匠」

メイはレイデンに投げかけた。レイデンは積み上げられた本の中から顔を出し、

「星草病は定期的に巡ってくる天上界の現象だ。こんなに大騒ぎする事じゃないのに、全く…」

何やら文句を言っている。

本日のお客様十人目“さそり座のメリディーン夫人”

「夫の浮気を治す薬をくださいまし」

「いや…そんな薬は……」

「浮気を予防し、今後一切しなくなるしたくなる薬をくださいまし」

「ちょ…ふ、夫人…落ち着いて下さい」

血走った眼で、ドレスのフリルを震わせる夫人のあまりの怖さに気圧されるメイ。

夫人は横目でレイデンを見る。

「いいえ、レイデン師なら出来るはずですね。そうでしょう」

「……………出来ない事も無いが、男としても尊厳とプライドを粉々にぶちこわすえげつない薬だぞ。そんな事してまでメリディーン卿の浮気性を治すくらいなら、奴との関係を考え直した方が気も楽だぞ」

「レイデン師！！お助け下さい！！」

午後のお客のいない時間に、薬局にいきなり駆け込んで来たのは王都ノーザンクロスの役人であった。天秤の皿を磨いていたメイは、もの珍しそうに役人を見る。王都ノーザンクロスには大きな薬局もあるし、宮廷星薬師もいるので、そうそう王都の人間がここまで来る事は無いのだ。

「あれ、めっずらしいですねえ、役人さんがこんなところまで来るなんて」

「シャラバトマ・メイ！！ レイデン殿は！？」

涙目でカウンターに身を乗り出す役人に若干引き気味の、メイは、隅のレイデンに視線を送った。
レイデンはむすつとしている。

「王都の人間が何のようだ」

「レ、レイデン殿おおおお！！ 偉大な星薬師であるあなた様に、私の一生のお願いが！！！」

「いいから用件を言え！！ 簡潔にだ！！」

「は、はい」

役人は何がそんなに大変なのか、カウンターに乗り上げ土下座気味

で、事情を説明し始める。

「実は、夜の儀式で“星の宮”に星火を灯すペガサス部隊が、どこから持って来たのか新型星インフルエンザに感染してしまつて。ええ、ほぼ全滅と言つて良いでしょう！！ このままでは夜の儀式での点灯が不可能となつてしまいます！！どうか、あなた様のお力をお借りしたく、わたくしめが参上つかまつたと言う訳です！！」

「なにがお力をお借りしたいだ。王都の星薬師どもで何とかしろよ」

レイデンは読んでいた本をパタンと閉じた。

役人はそれでもカウンターから降らない。

「それが新型星インフルですので、新たな薬の調剤に戸惑っているのです！！ もうお手上げなんです！！ このままでは、私の責任問題で星の宮に裁かれ、下手したら“星クス”にされます」

「良いじゃねーか、星クス野郎」

「良くないです！！」

役人はいよいよ号泣の域に入り、カウンターの上でピクシーにすらドン引きされている始末。メイはいよいよ気の毒と言うか、面倒くさくなり、レイデンの様子を伺う。

「師匠…どうします？ まあ王都の星薬師は商売敵で手を貸したくない気持ちは分かりますが…」

「……………」

レイデンは腕を組んだまま何かを考えているようだったが、役人のわめき声にしびれを切らし、立ち上がると杖を手に取った。

「ええい、うるさいうるさい。王都の星薬師も役人も、どこいつも使えない星クズばかり」

「レイデン殿！？ やって下さるのですか！？」

「うるさい、調子に乗るな。それが星の宮の意志なら仕方の無い事だ。儀式は我々星守の民に課せられた義務の様なもの。それが滞り無く行われるのに手を貸さなかったら、俺までもが裁かれてしまう」

「レ、レイデン殿おおおお」

役人はいまだカウンターの上で、何度も頭を下げていた。

「あの、いいかげんそこから降りてくれますか？」

メイはあきれ顔である。

しかしそれ以上に、師匠が彼ら王都の人間に手を貸す事に驚く。

「良いんですか、師匠」

「何が」

「だってノーザンクロスに行くんですよ。いくら夜の儀式に関する事情って言ったって、師匠が手を貸す言われは無いのでは？ 師匠には銀河病の患者だっている訳ですし」

「確かに」

レイデンはフードの中からメイを見おろした。

「しかし、ペガサス部隊は天上界に無くてはならない存在である事は事実。どんな病気であれ、苦しんでいるなら早く治してやるにこした事は無い。王都の星薬師は気に食わないが、患者に優劣があつてはならない。そして、病にもだ」

「……………」

「分かつたらさつさと準備しろ。ポイズンポプリは出来るだけ上質な物を」

「は、はい」

メイは慌てて、レイデンの言葉通りに動き出した。

準備をしながらも、繰り返しその“言葉”を気にしながら、やはり師匠は天上界にとって賢者となるだけある存在なのだと思います。

何かしらの一大事になる時、こういった“賢者”の偉大さにしびれたりするのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278y/>

天秤 薬局

2011年10月29日20時04分発行